出典：朝日新聞　2010年3月31日（水）

常識をつくり出す「プロボノ」通じ社会参加を

藤沢（ふじさわ）　久美（くみ）
シンクタンク・ソフィアバンク副代表

これまでの常識が通用しない時代とはいえ、日本も日本人も必要以上に自信を失っているように見える。よその国から見れば日本は今でも目標とされているのに、今までのようにしていてはダメだから、もう日本はダメだと思いこんでしまっているようだ。

古い常識が通用せず、新しい常識が生まれつつある今こそ、大チャンスだと思う。どういう常識が生まれるかを待つのではなく、こうあってほしいという常識をみんなでつくり出す時ではないか。

そのための有力な手がかりが、私たちも支援している社会的起業だ。政府も企業も手をつけなかった課題の解決を、起業を通じて図る。例えば、働く親に代わって病児をその子の家で保育する、中小企業やベンチャーに学生をインターンシップで派遣する、伝統の技をもちながら経営難に苦しむ酒蔵を支援するファンドを立ち上げる。

こうした試みに挑む社会起業家の多くは若く、思いは強いがノウハウに欠ける。そこで彼らに、組織づくりや会社運営のノウハウやスキルを無償で与えて支えようという「プロボノ」という運動が広がりをみせている。

その中心になるのがビジネスパーソンだ。社会起業家の目標に共感し、仕事の現場で培ってきた自分たちの力を本業の余暇に提供する。会社では何もできないとこぼす人たちほど、社内調整の大変さや組織運営の難しさをよく知り、物事を前に進めるためのスキルを身につけている。若い社会起業家は、大人の突破力から多くを学ぶだろう。

プロボノを通じてビジネスパーソンは、会社で身につけた力の大きさを改めて知り、それを社会変革に生かせるという実感を得る。金もうけにはならないが、プロフェッショナルとして本業のスキルもどんどん上がるだろう。

既存の企業と違って、社会的企業の場合は組織が小さいから、経営の全体が見渡せる。プロボノとして参加するビジネスパーソンにとって、最高のビジネススクールにもなるだろう。プロボノとしての活動から自分自身が新たな社会的な起業に踏み出すことができれば、すばらしい。

今は単線の人生を歩む必要はない時代だ。会社でも頑張り、プロボノとしても頑張るという生き方があってもいい。そんな時間はないというのであれば、社会的企業を支援するファンドや寄付を通して参加する手もある。

一人のスーパーマンは、もはやいらない。みんなが自分の得意なところを出し合えば、大きな力が生まれる。一人たりともむだな仕事はしていない。そうなったときに初めて、お互いに助け合える社会になると思う。

だからビジネスパーソンのみなさん、自信をなくしていないで、会社でぜひ腕を磨いてください。そして新しい常識づくりに参加しませんか。